

〔個人研究〕

羅什訳『衆経撰雑譬喻』を読む — 『維摩詰所説経』の注釈理解のために（三）

西 野 翠

まえがき

本稿は大正蔵経中で「雑譬喻」を名にもつ五部の経典¹のうち、羅什訳とされる『衆経撰雑譬喻』（T208）を通して、『注維摩詰経』（T1775）における羅什の注釈について理解を深めたいとの意図に基づき、三回に分けて発表するその三回目である。一回目では本稿の主旨についての説明と、『衆経撰雑譬喻』について若干の紹介をし、上巻（二十二話）の書き下しを公表した²。二回目では下巻（二十二話）の書き下しを掲載し、全四十四話の内容分析を試みた³。今回は、仏教において「譬喻」はどのような役割を担ってきたか、また『注維摩詰経』のなかで羅什はどのような譬喻をどのように用いているかを検討してみた。それによって、羅什が注釈で特に強調している点を明らかにしたいと考えたからである。

1. 仏典における「譬喻」について

「譬喻」に相当するサンスクリット語は *avadāna*, *drṣṭānta*, *nidarśana*, *rūpaka*, *sadrśa*, *upamā*, *upamāna*, *aupamyā*, *udāharaṇa* など複数あり⁴、インドの譬喻文学の豊かさを示しているといえよう。中国においては、サンスクリットの *upamā*, *drṣṭānta*, *avadāna* の三語がみな「譬喻」と漢訳された⁵。『衆経撰雑譬喻』を含むいわゆる『雑譬喻』五部は、十二分経における「比喩」（*avadāna*）に属し、いずれも「物語」の形をとった「譬え話」である。『撰集百縁経』の解題には、「譬喻とは現在世の出来事を前世に為した行為に結びつける所の — なんととなれば現在は過去の産物として考えられ

ているから— 縁を明らかならしむる運命的教訓である（レオン・フィヤーによる定義）⁶と説明されている。dr̥ṣṭānta, aupamyā, sadṛśa, udāharaṇa などはいわゆる「直喩」に相応する。

譬喩は仏陀の説法で常用される方式の一つであり、例えば『雑阿含経』（T99）にも、「仏告低舎。善哉善哉。低舎。今当説譬。大智慧者。以譬得解」（大正2・71b20～21）、「鬱低迦。今当為汝説譬。夫智者因譬得解」（大正2・248a2～3）と、譬えを以て教えを説き起こす場面が数多く見られる。『百喩経』の解題には、「喩物語は印度人の非常に得意とするところであって有名な文学作品には到る処発見せられるものである。また、釈尊自身も非常に巧みでありその教説に応用せられ、了解し難き説法は理解を容易ならしめ、面前の譬喩物語によって自然に解脱へと導かれたことであつた」⁷と述べられている。以上の如く説明される譬喩の「はたらき」について、丁 [1996] は以下のように述べている。

集成された美麗壯観かつ複雑多様な仏教譬喩文学は人々の宗教感情を直接揺り動かした。このため、仏教の譬喩文学は人々に物語を鑑賞する寛いだ気分で仏理の奥義を感受し、聖界と俗世間の間のつながりを感じさせるものであり、仏理の奥義に入る「方便の法門」である。⁸

仏教における譬喩が「方便の法門」であるとすれば、巧みな方便の使い手である『維摩経』の主人公・維摩詰（Vimalakīrti：以下、維摩）は「譬喩の名手」といえよう。次項において、経中で維摩が用いている譬喩を一覧したい。

2. 「方便の人」維摩の用いた譬喩

『維摩経』第2章は「不可思議にして巧みな方便」（羅什訳「方便品」）と題されており、不可思議にして巧みな方便（acintyopāyakaśalya）に秀でた維摩の人となり描出されている。

[維摩は] 巧みな方便（善巧方便）に通達し、… 善巧方便をもって衆生を成熟させるために、ヴァイシャーリーの大城に住んでいた。（II-1）⁹

彼は善巧方便によって、自分が病んでいることを示した。(II-7)¹⁰

維摩の「不可思議にして巧みなる方便」は文殊師利(Manjuśrī)も讃えるところであり、維摩の近づき難いほどに勝れた特性を列挙するなかで、「善巧方便に了達しており」¹¹との一項を加えている。そこで、維摩が「方便の法門」としての譬喩を説示の中でどのように用いているかを見てみよう。

維摩の最初の説法は、病床を訪れた見舞客に対する「衆生の肉体」についての説法である。そこでは、日本の文学にも少なからぬ影響を及ぼした所謂「十喩」が説かれている。これは「～は…の如し」という「直喩」の類であり、肉体が「泡、水泡、陽炎、芭蕉、絡繰り、幻、夢、影、こだま、雲、電光」さらには「大地、水、火、風、虚空」などに喩えられている(II-9～11)¹²。また、大迦葉(Mahākāśyapa)に対する説法では「こだまのようなものとして、声を聞くべきです」「風と等しいものとして、香りをかぐべきです」(III-12)と語り、また富楼那(Pūrṇa)に対しては「偉大な宝器に、粗末な食物を盛ってはいけません」とか「瑠璃の宝とガラス玉をいっしょにしてはいけません」(III-21)と譬えをもって語っている。優波離(Upāli)には「一切諸法は夢や陽炎のようなもので…」「一切諸法は水月や鏡像のようなもので…」(III-35)と「十喩」に類する表現がみられ、悪魔パーピーヤスの天女たちへの法の樂園についての説示では、五蘊が殺し屋(死刑執行人)、四大が毒蛇、六内処が空村にそれぞれ喩えられている(III-64)。また、これに続く「無尽灯の法門」の説示は非常に印象的な譬喩物語である(III-66)。

ほかにも維摩は数多くの譬喩を用いており、文字どおり枚挙に遑がない。最後に一例だけ挙げるとすれば、維摩が文殊に対して自分が病む理由を説く場面で用いられた譬喩である。「たとえば、マンジュシュリーよ、長者の一人息子が病気になったとしましょう。[そのとき]彼の両親もまた、病気となるようなものです」¹³(IV-7)と始まるこの譬喩物語は、羅什訳の「一切衆生病むを以て、是の故に我病む」¹⁴でも有名である。

ただ、これらの譬喩にもまして、維摩が仮病を装って人々を病床に集めているという設定自体が実は最も重要な譬喩であり、『維摩経』の作者こそ優

れた譬喩の使い手である点に注意したいと思う。

3. 羅什が『維摩経』注釈において用いた譬喩

羅什による『維摩詰所説経』の翻訳は、「羅什が梵文を片手に訳文を口述する」という形で進められたと伝えられるが¹⁵、訳場には羅什門下の弟子をはじめとする大勢の聴衆が同席し、羅什は訳述すると同時に經典の注釈も行ない、その注釈のなかで多くの譬喩や物語を用いたことは既に指摘されている¹⁶。既述のように經典そのものに多くの「譬喩」がみられる「維摩経」の注釈において、羅什はどのように譬喩を用いているのだろうか。

『注維摩詰経』に残された羅什の注釈は670を超える。どのような場合に注釈が付されるかという点、①語句の解説、②異国の習慣文化の説明、③教理の解説、④経文の理解を助けるための状況説明、などの場合である。そのなかで譬喩が用いられているのは50余りで、そのうち物語は20余りである¹⁷。それら50余例の注釈を経文と合わせて一覧すると表1のごとくなる。(経文末尾のI-3等の数字は「第1章3節」等の意。注釈末尾の頁数は大正大学出版『対訳 注維摩詰経』の該当箇所。物語が用いられている注釈には「什曰く」の前に*を付し、その物語の出典と思われる經典等が明らかな場合には末尾に示した。)

表1 『注維摩詰経』で用いられた羅什の譬喩

品名	経文	注釈(譬喩)
仏国品	其の講説する所、乃ち雷震の如し。(I-3)	什曰く。正智の流潤すること、譬えば天雨の如し。弁音、響を發すること、なお雷震の如し。人には慧あるも弁ぜざる、… (p.23) : 『大智度論』(大正25・98c)
方便品	神通に遊戯す。(II-1)	*什曰く。神通によってその化功を広む。また神通力をもってその弁才を証す。龍樹が外道を論議するが如し。外道問いて曰く。… (p.95) : 『付法蔵因縁伝』(大正50・318a)
	諸の学堂に入りて、童蒙を誘開す。(II-4)	什曰く。釈迦菩薩、学堂に入りて梵書を説き、梵天下り来りて証を為さば、衆人信受するが如し。(p.105) : 北本『大般涅槃経』(大正12・388c)、『付法蔵因縁伝』(大正50・318a)

方便品	諸の淫舎に入りて欲の過を示す。(II-4)	*什曰く。外国に一人の女あり。身体金色なり。長者子ありて... (p.103-104)：『仏説大淨法門經』『大莊嚴法門經』(ともに大正17)
	若し庶民に在りては、庶民の中の尊として、福力を興さしむ。(II-6)	*什曰く。昔、一賤人あり。来りて城邑に入る。一人の服飾嚴浄にして、大馬に乗り宝蓋を執るを見る。... (p.108)
	是の身は我無きこと火の如しとなす。(II-10) Skt.は「無我=水」	什曰く。林野を梵焼すれば威勢振烈なること、勇士の師を陳ねて勝を制する時の如し。... (116頁)
	是の身は丘井の如し。(II-11)	*什曰く。丘井とは丘墟の枯井なり。昔、人ありて王に罪することあり。... (p.121)：『寶頭盧突羅闍為優陀延王説法經』(大正32・787a)、『衆經撰雜譬喻』(大正38・342b-13)
	[是の身は] 空聚の如し。(II-11)	*什曰く。昔、人ありて、王に罪を得。王、密かに殺さんと欲し、箱に四毒蛇を盛り、それをして守護せしむ... (p.123-124)：『大智度論物語』(大正25・145b)に同じ話あり。北本『大般涅槃經』(大正12・499b)『衆經撰雜譬喻』(大正4・533a27-b14)
弟子品	仏、須菩提に告げらく。(III-15)	什曰く。秦には善業といい、解空第一なり。... 請うに喩を以てこれを明かさば、譬えば、射を善くする人、發して物を遺すこと無し。... (p.175-176)：『大智度論』(大正25・138c, 187c)
	故に我れ、彼に詣でて疾を問うに任えず。仏、羅睺羅に告げらく。(III-38)	*什曰く。阿修羅の月を食らう時を羅睺羅と名づく。... いわく、月明を障ぎるなり。... 羅睺羅の因縁および出家のこと、声聞法を以て略説するなり。(p.227-229)：『大智度論』(大正25・135b) *羅睺羅が月を食うという話。
	転輪王の位を捨て、(III-38)	*什曰く。転輪王もまた胎に入らざる者あり。頂生王の如き、是なり。... (p.230-231)：『長阿含經』「世紀經」(大正1・119a)
	(出家は) 外道を調伏する。(III-39)	什曰く。出家は者を摧かんと以わざるも、... なお日出づれば、衆冥自ら滅するが如し。(p.238)
	阿難よ、転輪聖王は少福を以ての故に、なお病なきを得。(III-44)	*什曰く。羅漢あり。薄拘羅と名づく、往昔、売薬師となり、... (p.247-248)：『大樓炭經』(大正1・282c)
	即ち空中の声を聞く。曰く、阿難よ、居士の言の如し。... (III-46)	什曰く。劫濁、衆生濁、見濁、命濁なり。多歳の数を由泓と名づけ、... (p.253-254)：『菩薩地持經』(大正30・928c)

菩薩品	身、命、財において堅法を修すべし。(III-62)	什曰く。若し命ありと雖も而も道を行ずる能わざれば、禽獣の命に異なるなし。若し今に於いて能く身命を惜しまずして行善を修すれば、則ち … (p.295)
	その時、維摩詰は諸の女に語りて言く。… (III-64)	什曰く。女人は主に従うを心となす。魔に属すれば則ち邪教を受け、菩薩に属すれば則ち道化に従う。… (p.299)
	法楽あり。以って自ら楽しむべし。復た五欲の樂を樂うべからず。(III-64)	*什曰く。それ魚の性たるはただ水これにより、女人の性はただ樂これを欲す。初めて道意を發せば自ら厲きて善を修し、未だ樂を能くせざるなり。… (p.299-300)
	五欲を離るるを樂しみ、(III-64)	*什曰く。これ戒を信ずるなり。四信を得る時 … 譬えば、人の重病なるに藥を服し、若し … (p.301-302)
	衆生を饒益するを樂しみ… (III-64)	什曰く。羸提比丘の如く身体を割截すと雖も … 〈羸提比丘は周知の存在なので物語らない。仏がむかし菩薩の修行を修して忍辱の行を成満した時の名〉(p.303)：『大智度論』(大正25・89b)
	慳貪を摂するを以って檀波羅蜜を起こし、… (III-69)	什曰く。初め忍を行ずる時、則ち我のために福を求む。… 譬えば、水中に火を生ずれば、よく滅尽する者なきが如きなり。(p.318)：『大智度論』(大正25・395c)
	六和敬において質直の心を起こす。(III-72)	什曰く。衆をして和せしめんと欲せば、… 昔、二衆ありてともに諍を行ず。仏、これによりて六和敬を説く。(p.323)：『中阿含』(大正1・755b)『十誦律』(大正23・367b)
	相好を具し、及び仏土を淨むるを以って福德の業を起こす。(III-73)	什曰く。一切の善法を分かちて二業となす。… 譬えば、両輪はよく至る所あるが如し。(p.325)
問疾品	身の空寂なると説きて、畢竟空寂なりと説かず (IV-10)	什曰く。その利鈍に隨うが故に説に広略あり。譬えば、大樹は一斧の傾くる所に非ざるが如し。… (p.367)
	修するところの福を憶い、(IV-10)	*什曰く。外国の法は生まるより終るに至る所作の福業を一一に書記す。もし命終の時は、傍人為に説いて… (p.371)：『雜阿含經』(大正2・367c)〈閻魔王(yama)の思想と関係あるか)
觀衆生品	その時、文殊師利は維摩詰に問いていわく。菩薩はいかんが衆生を觀ずるや。(VI-1)	*什曰く。衆生に若し真實の定相あらば、則ち… 一人の痴人、路を行くに、たまたま遺匣を見る。… (p.433-434)：『百喻經』「宝篋鏡經」(大正4・548b)

観衆生品	譬えば、人の畏るる時、非人その便を得るが如し。(VI-8)	*什曰く。一の羅刹、形を変じて馬となるが如し。一の士夫あり。これに乗りて疑わず。道半ばにして、馬... (p.464) : 『根本説一切有部毘奈耶・雜事』(大正24・317b)
	... 此の室に入る者は、諸垢の為に悩まされざるなり。(VI-13)	什曰く。その室、清浄にして逆気の悪神なし。... 悪神の起ること、十頭の羅刹、一王の体に入りて怒害即ち生ずるが如し。(p.477) : 『大智度論』(大正25・229b)
	此の室には一切諸天の嚴飾の宮殿、諸仏の浄土皆な中に現ず。(VI-13)	什曰く。方寸の金剛あらば、数十里の石壁の表に所有の形色悉く是に現ずるが如し。(p.477-478)
仏道品	訥鈍を現ずるも、而も弁才を成就し、総持して失うこと無し。(VII-1)	什曰く。太子慕魄の如き ^{たぐ} 比いなり。(p.496) : 『仏説太子慕魄經』(大正9・55c)
	慈悲心を女とす。(VII-6)	什曰く。慈悲は性弱し、物に従つて有に入る。猶、女の性たるや弱くして、物に随うが如きなり。(p.510)
	畢竟空寂は舍なり。(VII-6)	什曰く。風雨を障ぎること、舍に過ぎたるはなし。衆想を滅除すること、空より妙なるはなし。... 密宇の深重にして寇患自ずから消ゆるが如し。... (p.511)
	覚意は浄妙華。(VII-6)	*什曰く。華の体、合すれば則ち妙ならず。開きすぐれば則ち毀る。... 亦復かくの如し。高ければ則ち放散し、下ひくければ則ち沈没す。... (p.514)
	調御するに一心を以てし、(VII-6)	什曰く。一心は梵本には和合 ^{むつごう} という。... 譬えば、善御、遅ければ則ちこれに策ち、疾ければ則ちこれを制し、... (p.518)
	深心を華鬘と為す。(VII-6)	什曰く。深心に信樂するが故に、能く善を修す。善に処するの先なること、猶、華鬘の首にあるが如し。又云く。深心は... 華鬘の形服を飾るが如きなり。(p.520)
	多聞にして、智慧を増し、以て自覺の音と為す。(VII-6)	*什曰く。向に床を説くは、則ち其れに眠りて安寝す。... 外国の貴人、眠る時要らず楽人に勅し、明相出づる時かすかに音楽を奏さしめ、... (p.523) : 『四分律』(大正22・602a) など
	勇健なること踰ゆるものなし。四種の魔を降伏して、勝幡を道場に建つ。(VII-6)	什曰く。外国には、敵を破して勝を得れば、則ち勝幡を堅つ。道場に魔を降して、またその勝相を表すなり。(p.526)

仏道品	諸有衆生の類の ... 或いは老病死を示して、(VII-6)	什曰く。仏の弗迦沙王を化せんと欲するが故に、現じて老比丘と作るが如し。... (p.528) : 『法句譬喻經』(大正4・580c~)
	劫中に疾疫あれば、現じて諸の菓草と作り、(VII-6)	*什曰く。或いは病を除かしめ、... 外国に奇妙の菓草あり。或いは人の形に似、或いは象馬の形に似る。... (p.530)
入不二法門品	徳頂菩薩曰く。垢と浄とを二となす。垢の実性を見るに、(VIII-3)	什曰く。穢物を洗うが如し。尽くるに至れば乃ち浄し。浄なれば則ち尽く。尽くれば則ち浄なきなり。(p.540)
	雷天菩薩曰く。明と無明とを二となす。無明の実性は即ち是れ明なり。(VIII-3)	什曰く。無明はよく明を生ず。故に明に異ならず。... 譬えば、蓮華の色は潔凜なりといえども、所因は不浄なるが如し。その所因を推せば心に著を生ぜざるなり。(p.547)
	福田菩薩曰く。福行、罪行、不動行を二となす。(VIII-25)	什曰く。福行は...。罪行は...。無動行は...。不動の義は、通達仏道の中に説くが如きなり。(p.552)
	ここに於て文殊師利、維摩詰に問う。我等各、自ら説き已る。仁者、当に説くべし、... (維摩の一黙)	*什曰く。仏泥洹より後六百年に一人あり。年六十にして出家す。... それ黙と語と殊なると雖も、宗を明かすこと一なり。会するところ一なりと雖も、しかも迹に精麤あり。無言をいうことあるは、未だ無言をいうことなきにしかず。故に黙然の論は、論の妙なり ¹⁸ 。(p.557-558) : 『馬鳴菩薩伝』(大正50・183a-184a) 『大智度論』(大正25・748c) 『付法藏因縁伝』(大正50・314c)
香積仏品	譬えば象馬の攏俣にして不調なるものには、諸の楚毒を加え、乃し骨に徹して、然る後に調伏するが如し。(IX-15)	*什曰く。馬に五種あり。第一は、鞭の影を見れば即時に調伏す。... 衆生の利鈍にまた五品あり。第一は、ただ他の無常を見ればその心すなわち悟る。... (p.575)
	然れども、その一世に衆生を饒益すること、かの国の百千劫の行よりも多し。(IX-16)	什曰く。譬えば良医、疾疫劫中に遭い、医術大に行いて広く衆薬を施し、療せらるる者おおく供えを致すこと無量なるが如し。... (p.577)
	かの菩薩曰く。菩薩 幾の法を成就してか、この世界に於いて行ずるに瘡疔なくして浄土に生ずるや。(IX-18)	什曰く。深行の菩薩は疑う所に非ざるなり。... 譬えば、小湯之を大水に投ずるが如し。また少力の人、水に入りて溺るるものを救わば、未だ兼済する能わずして、則ち彼と俱に淪むが如し。... (p.578) : 『大智度論』(大正25・275c, 415c)
	常に己が過を省みて彼の短を詮めず。(IX-18)	*什曰く。一比丘、林中に坐禅するが如し。時至つて食を須め、鉢を持ちて林を出づるに、路に悪賊と逢う。... 我れ腹のために林を出づるが故に ... これ腹の罪なるのみ。... (p.582) : 『経律異相』(大正53・108b)

菩薩行品	あるものは仏の衣服、臥具を以って仏事を作す。(X-8)	什曰く。昔、閻浮提の王、仏の大衣を得。時に世に疾疫あり。王、衣をもって標の上に著け、以って衆人に示す。帰命するに病みな愈ゆるを得れば ... (p.593)
	あるものは三十二相、八十随形好を以って仏事を作す。(X-8)	什曰く。あるいは一相、二相ないし衆多の相、見るに応ずるところに随って ... 萍沙王、仏像を以て弗迦沙王に与え、これによって悟りを得るが如きなり。... (p.594) : 『萍沙王五願経』(大正14・779a~)
	... 諸仏は即ちこの法を以って仏事を作す。(X-10)	什曰く。仏事に三種あり。... 譬えば、薬師、或いは良薬を以て、或いは毒薬を以て人の病を治すが如きなり。仏も亦かくの如し。(p.597)
	菩薩の如きは有為を尽くさず、(X-16)	什曰く。謂く一切の善は是れ有為の功德なり。... 譬えば無量の怨賊、かの大城にあり。城中に人あって来たり降す。この人によって怨賊を破するを得るが如し。... (p.608)
	深く一切智の心を発して忽忘せず。(X-17)	什曰く。仏道を志求するはその心深固ならん。譬えば、樹を種うるに根深ければ抜き難きが如し。故に劫を歴て愈明らかにして、暫くも失わざるなり。(p.610)
	四摂法において常に念じて順行す。正法を護持して軀命を惜しまず。諸の善根を種えて、(X-17)	*什曰く。... 一人あって舍利弗の処に到り、出家を求むるが如し。舍利弗、その宿命を觀るに八万大劫に善根を種えざれば、棄てて度せず。... (p.611-612) : 『大莊嚴論経』(大正4・311b~)
	志常に安住し、方便して廻向す。(X-17)	什曰く。万善は無常にして、意に随いて成ずるところなり。故に ... 餅沙王、繫がれて獄にあるが如し。獄の穴の中よりはるかに仏の山上を往来するを見る。... (p.613) : 『鞞婆沙論』(大正28・521b~)
	法を説きて憍むことなし。(X-17)	什曰く。梵本に云く。師は憍むこと ¹⁹ 無し。外道の師は弟子の為に法を説くも、法の要は則ち握りて与えず。菩薩は則ちその所懐を尽くす。故に師には憍むこと無しと言うなり。(p.614)
	来たり求むる者を見ては善師の想を為して、(X-17)	*什曰く。もと施の意なし。彼れ来たりて求むるによって、我が施心を発す。... 月氏王の出行遊觀の如し。... (p.616-617) : 『大莊嚴論経』(大正4・272a~)
法供養品	その時、釈提桓因、大衆の中において仏に言さく。... 未だかつてこの不可思議、自在神通、決定実相の經典を聞かず。(XII-1)	什曰く。維摩詰、妙喜世界を接し来たりてこの境に入る。... この経は略して衆經の要義を叙ぶ。明簡にして了しやすし。故に未曾有と歎ずるなり。またいわく。我に会するを妙となす。故に未曾有と歎ずるなり。(p.669)

囑累品	…もし未来世の善男子善女人にして大乘を求むる者には、まさに手にかくの如き等の経を得しめ、それに念力を与え、… (XII-20)	*什曰く。神通を以てその念力を加え、忘れざらしむるなり。… 優波掘の恩力なり。故し仏在世の時、外道薩遮尼犍あり。大いに聡明にしてよく論議す。… (p.708-711)：『阿育王伝』（大正50・111b～）『付法藏因縁伝』（大正50・304～）『雜阿含経』（大正2・35a）『増一阿含経』（大正2・715a）
-----	---	---

4. 『注維摩詰経』における鳩摩羅什の注釈の性質

『維摩経』の翻訳に際し、空・不二という難解な教義を数百人、数千人にも及ぶ大聴衆に理解させるのは容易ならざることであつたにちがいない。高度な哲学思想であると同時に、異国の文化でもある仏教を講ずるにあたって、羅什は譬喩や物語を一種の視聴覚教材として用いたのではないだろうか。それゆえ、時には聴衆を楽しませることを狙つたと思われる、経文の解説にしてはいささか長過ぎる物語もみられる。羅什が聴衆の理解の程度をうかがいながら、個々人の能力（機根）に応じた説法に心を砕いていたことを示す羅什自身のことばを『注維摩詰経』の中に見出すことができる。

什曰く。その利鈍に随うが故に説に広略有り。譬えば大樹は一斧の傾くる所に非ざるが如し。累根既に深ければ一法の能く除くに非ず。或いは無常を聞くと雖も謂いて苦ならずということ有り。則ち為に苦を説く。既に苦を聞かば便ち苦樂の主有りと謂う。故に無我及び空を説くなり。²⁰

「累根既に深ければ」とは絡み合つた木の根を連想させる。羅什はその絡んだ根をほぐし筋道を通すために、種々の譬喩や逸話・物語を補助教材として用いた。今日われわれは文字としてしか羅什の注釈に触れ得ないが、実際の訳場では、声や身振りも加わり、羅什は經典の翻訳・解釈をする大仏教学者というにとどまらず、宣教する仏教講釈師のごとき役割も担っていたと考えられる²¹。「雑譬喩」などはその講釈の「ネタ本」としての役割を果たしていたのかもしれない。実際、羅什が中国で活躍した時代には、既にいくつかの仏教説話集が漢訳されており、それらは新学の僧の教育資材となつていたようである²²。

『衆経撰雜譬喩』は、羅什自身が『維摩経』を翻訳した前年（405年）に

翻訳したものである²³。『維摩経』の注釈で用いられたのはそのうちの二、三の物語にすぎないが、新学の僧もよく知っている説話として取り入れたものであろう。穿った見方をすれば、翻訳場における経文の解釈に用いる物語のストックとして、『衆經撰雜譬喻』を早い時期に翻訳していたとも考えられる²⁴。

ちなみに、『高僧伝』の伝えるところによると、羅什の小乗の師・槃頭達多が遠路はるばるやって来て、羅什の大乗への転向を責めたとき、羅什は譬えをもって陳べたて（連類而陳之）、師と問答すること一ヵ月に及び漸く納得させることができた（往復苦至経一月余日。方乃信服）。²⁵ ここでいう「連類」はしばしば「比物」とともに用いられ²⁶、いわゆる「譬喻」「類例」に相当する。羅什と槃頭達多の問答について具体的な記録は残されておらず推測するほかないが、羅什が縦横に用いた「比物連類」のうちには『集經撰雜譬喻』をはじめとする「雜譬喻」に含まれるものもあったことは想像に難くない。

5. 『注維摩詰経』と『大智度論』

高崎 [1998] は、「羅什がインド的なものを中国的な理解にもたらすために非常に苦労していたこと」²⁷を指摘し、譬喻や説話の使用はその苦労の現われの一つとみて、以下のように述べている。

「（『注維摩』における）羅什の注釈には譬喻とか説話・因縁話が多く、たくさん出てまいります。…… こういう傾向は実は、『大智度論』がそうなんです。『大智度論』は非常に多くの説話を挙げてくれています。…… 『智度論』の中で中国人に理解させるために、まさにその多識（*abhijñāta*）とされている羅什自身が、知っている知識をフルに使って、これを注釈という形でサービスに挙げたのではないか、そういう気が『注維摩』における羅什の注釈例から考えられ推定されるわけでありまして、こういった角度からまた『智度論』の研究をするということも、非常に必要なのではないかと思います。」

ここでの指摘と逆になるが、『注維摩』における羅什の註釈を理解するには『大智度論』の研究も必要ということになりそうである。

おわりに

仏教經典は膨大な譬喩の海に浮かぶと言っても過言ではない。仏陀の悟りの内容は言語で表現できることではないため、比喩的な表現を必要とする。ひとり仏陀のみならず、キリストも説法のなかで多くの喩えを用いている。宗教的な教えを聴衆の胸に落ちるように伝えるには、単に論理的な説明だけでは十分ではなく、情感に訴える物語が必要になる。

さらに、インド生まれの仏教を中国で説くには、歴史文化の相違という壁が立ちはだかる。例えば、「大品経序」（僧叡）に、「而て経、茲の土に来るや、乃ち秦言を以って之を訳す。典謨²⁸は殊制に於いて乖れ、名実是不謹に於いて喪わる。之を求めて弥^{いよ}いよ至るも、之を失うこと弥^{いよ}いよ遠からしむに致^{いた}る。重^{ちゆうかん}関^{たずな}に轡^とを頓め、窮路^と転た廣し。」²⁹とある。印度渡来の仏教理解は困難を極め、「典や謨の文体も制度が異なるために分からなくなり、名も実も不注意のために失われてしまう。それを求めれば求めるほど、いよいよ真の理解から遠ざかる。嚴重に鎖された門に馬を停め、行き止まりが広がるばかり」という状況で、「淵匠³⁰に遇はざれば、殆んど将に墜ちなん」³¹という苦境に立たされていた。そこへ、時運巡って登場したのが羅什であった。同じく「大品経序」に、「鳩摩羅什法師、慧心夙^{つと}に悟り超^{ちゆうぼつ}拔^{いた}特^{をか}に詣る。天魔干^{めく}すも廻らす能はず。淵識難ずるも屈する能はず」³²とあるように、羅什は「智慧のころによって早くから悟り、群を抜いて傑出していて、天魔が攻めても回転させることはできず、深い知識をもった師が難じても屈することができなかった」という。当時の仏教界にあって羅什はまさしく太陽のごとき存在であったことが知られる。その彼がなんとか聴衆に経の理解を得させんとして、豊富な譬喩を用いて力強く熱弁を揮う姿が『維摩経』の注釈からうかがえるといえよう³³。

《参考文献》

- 慧皎著／吉川忠夫・船山徹訳 [2009] 『高僧伝 (一)』、岩波書店
- 横超慧日・諏訪義純 [1996] 『人物中国の仏教 羅什』、大蔵出版 (初版1382年)
- 加地哲定 [1979] 『増補 中国仏教文学研究』、同朋社出版
- 木村英一編 [1962] 『慧遠研究』 (創文社)
- ケネス・K・S チェン／福井文雅・岡本天晴訳 [1981] 『仏教と中国社会』、金花舎
- 定方晟 [1989] 『『雑譬喻経』訳注』 (『東海大学紀要文学部』Vol.51)、東海大学文学部
- 蕭世昌 [2010] 『鳩摩羅什の長安譯場』 (仏光文選叢書)、仏光文化事業有限公司
- 昭和新聞国訳大蔵経編集部編 [1930] 「昭和新聞国訳大蔵経 經典部第2巻」、東方書院
- 菅原法嶺訳 [1931] 「百論経・雑譬喻経」 (仏教文庫)、東方書院
- 杉山龍清 [1991] 「雑譬喻経類について (一)」 (『立正大学大学院年報』Vol.9)、立正大学
- 杉山龍清 [1991] 「雑譬喻経類について (二) — 『衆經撰雜譬喻』収載の譬喻説話をめぐって—」 (『論集』第18号)、印度学宗教学会
- 諏訪義純・中嶋隆蔵訳 [1996] 『大乘仏典 (中国・日本篇) 14 高僧伝』 (中央公論社)
- 孫昌武・李慶揚 [2008] 「雑譬喻経訳注 (四種)」 (『仏教經典訳注叢書』)、中華書局
- 孫昌武 [2010] 「關於佛典翻譯文學的研究」 新疆哲学社会科学網, http://big5.xjass.com/mzwh/content/2008-11/06/content_38850.htm (2015年4月7日現在)
- 大正大学綜合佛教研究所 注維摩詰経研究会 [2000] 『対訳 注維摩詰経』 (山喜房佛書林)
- 高崎直道 [1998] 「インド仏教と中国仏教の間」 (『東洋の思想と宗教』第15号)、早稲田大学東洋哲学会
- 高橋尚夫／西野翠 [2011] 『梵文和訳 維摩経』、春秋社
- 丁敏 [1996] 『仏教譬喻文学研究』 (中華仏学研究所論叢8)、東初出版社
- 東元慶喜 [1968] 「佛典に見える譬喻の種類」 (『印度学仏教学研究』Vol.17-1)、印度学仏教学会
- 中村元・増谷文雄監修 [1981~1983] 『仏教説話大系』 (第9~12巻)、すずき出版
- 船山徹 [2014] 『仏典はどう漢訳されたのか — スートラが經典になるとき』、岩波書店 (第一刷 2013)
- 森彰司編 [1994] 『仏教譬喻例話辞典』、東京堂出版 (初版 1987)
- Tyson Jeseoph Yost [2013] “A Study of Avadana Narratives and the Communities that Read them in Early Medieval China”, Cornell University
- Yuet Keung Lo (劳悦強) [2002] ‘Persuasion and Entertainment at Once: Kumārajīva’s Buddhist Storytelling in His Commentary’ (『中國文哲研究集刊 第二十一期』)、中央研究院中國文哲研究所／西野翠和訳 「説得と娯楽を同時に：『維摩経』の註釈における鳩摩羅什の仏教説話」 (『大正大学綜合佛教研究所年報 第三十三号』、2011年3月) を参照。

(大正大学綜合仏教研究所研究員)

- ¹ T204『雑譬喻經』（一卷）後漢 支婁迦讖訳、T205『雑譬喻經』（二卷）失訳、T207『雑譬喻經』（一卷）道略集、および T206『旧雑譬喻經』吳 康僧会訳（二卷）、T208『衆経撰雑譬喻』道略集・姚秦 鳩摩羅什訳（二卷）の五部である。「雑譬喻」というその名の示すとおり、これら經典には種々雑多な譬喩や因縁話が収められている。
- ² 参照：『大正大学綜合仏教研究所年報』（第36号）、大正大学綜合仏教研究所、2014年、395-419頁。
- ³ 参照：『佛教文化学会紀要』（第24号）、佛教文化学会、2014年（出版待ち）。
- ⁴ 参照：森編 [1987]、379頁。
- ⁵ その理由については、丁 [1996]、13～17頁、「梵文 *upamā, dṛṣṭānta, avadāna* 三字皆漢訳『譬喩』的理由」を参照。
- ⁶ 参照：『国訳一切経 本縁部五』（大東出版、1929年初版）、74頁。
- ⁷ 参照：『国訳一切経 本縁部七』（大東出版、1930年初版）、1頁。
- ⁸ 丁 [1996]、1頁。なお『出三蔵記集』には、「譬喩經者。皆是如來隨時方便四説之辭。敷演弘教訓誘之要。牽物引類轉相證據。互明善惡罪福報應。皆可瘡心免彼三途如今所聞億未載一。而前後所寫互多複重。今復撰集事取一篇。以爲十卷。比次首尾皆令條別。趣使易了於心無疑。願率士之賢有所遵承。永升福堂爲將來基。」(T2145・68c17～23) とある。
- ⁹ *upāyakaūsalyagatimṅgataḥ, sa satvapariṣkāyopāyakaūsalyena vaiśālyam mahānagaryām prativasati sma* / (大正大学出版会『梵文維摩經』、15頁)
- ¹⁰ *sa upāyakaūsalyena glānam ātmānam upadarśayati sma* / (同書、17頁)
- ¹¹ *upāyakaūsalyagatimṅgataḥ* (同書、45頁)
- ¹² 同様の譬喩が第6章「天女（觀衆生品）」の冒頭でも用いられ、「もとより存在しないもの」という衆生觀が示されている (VI-1)。
- ¹³ *tadyathā mañśrīḥ śerṣṭhina ekaputrako glāno bhavet / tasya mātāpitarāv api glānau syātām* / (同書、47頁)
- ¹⁴ 該当箇所のスンスクリット文は “*sa satvāglānyena glāno bhavati, satvārogyāt tv arogaḥ* /” 「彼は衆生の病いによって病む者となり、衆生の病いが癒えることによって病いなき者となるのです」（『梵文維摩經』、p.47；高橋/西野 [2011]、p.91）
- ¹⁵ 「時手執胡文口自宣譯道俗虔虔一言三復。陶冶精求務存聖意。其文約而詣。其旨婉而彰。微遠之言於茲顯然」（同上五八頁中一六～一七）。
- ¹⁶ Yuet Keung Lo (勞悦強) [2002]、89～116頁を参照。なお、勞氏のこの論文の和訳は『大正大学綜合佛教研研究所年報 第三十三号』（2011年3月）に「説得と娯楽を同時に：『維摩經』の註釈における鳩摩羅什の仏教説話」として拙訳が収載されている。
- ¹⁷ 羅什の註釈の多くは語句や教理の解説だが、異国の習慣・文化の説明や経文の理解を助けるための解説などで譬喩や物語が用いられている。大乘仏教の難解な教義を大聴衆に理解させるのは容易ならざることであり、羅什は説法に娯楽性を加味し譬喩や物語を多用したものと考えられる。

- ¹⁸ 高崎 [1998]、164-165頁に、「維摩の一黙の所の説明にこれ〔この喩え〕を挙げているのであります。… これはいったい何に由来しているのか、その出典をまだ他には見たことがありませんので」と記されているが、大正藏經所収のものではなく名古屋七寺の古写本に「沙門黙然、容无負色、亦无勝顔」（12行目）とある。
- ¹⁹ 梵文テキストには「師の拳がない」（*anācāryamuṣṭih*）とあり、同じ表現がVI-2にも見られる。
- ²⁰ 大正38・375a17～21：什曰。隨其利鈍故說有広略。譬如大樹非一斧所傾。累根既深非一法能除。或有雖聞無常謂言不苦。則爲說苦。既聞苦便謂有苦樂之主。故說無我及空也。
- ²¹ 『注維摩詰經』における羅什のコメントの特徴は、『大乘大義章』（T1856『鳩摩羅什法師大義』）における羅什の論述と対照させると、一層際立ってくる。廬山の慧遠とのこの書簡集にも隱喩や直喩はよく出てくるが、それは論議されている問題に合致する内容のものばかりである。非常に長い物語が一度引かれているが、文脈から逸脱したものではない。当代きっての博識な学僧が相手であり、既に信仰があり回心を迫る必要はないので、問答は純粹に思想哲学的性質のものとなり、羅什は布教手段としての物語を用いる必要はなかったものと思われる。むしろ、自分の主張の根拠として、『大智度論』、『法華經』、『般若波羅蜜經』、『維摩經』、さらには『華嚴經』、『首楞嚴三昧經』、『般舟三昧經』、『思益經』、『自在王經』、『蜜迹經』などの經典からの經文が多用されている。
- ²² 492年に求那毘地（Gunavarḍdhi）によって翻訳された『百喩經』（T209）の序（T2145『出三藏記集卷 第九』）には、「天竺僧伽斯法師。集行大乘。爲新學者。撰說此經」（大正4・68c27～28）とある。この經典が「新学の僧に大乘仏教の基本を習得させることを目的としていた」ことがうかがえる。
- ²³ 同じく道略集編『雜譬喩經』一卷（No.207）も羅什訳ではないかと推測されている。その根拠は、『大莊嚴論經』（No.201）や『大智度論』（No.1509）など、羅什訳とされるものに『雜譬喩經』と類似の物語が多いことである。
- ²⁴ 羅什が長安に入ったのは401年12月で、その翌年から『座禪三昧經』をはじめ、『大智度論』、『摩訶般若波羅蜜經』、『百論』など重要な經典の翻訳を手がけ、『衆經撰雜譬喻』は405年という比較的早い時期に訳されている。
- ²⁵ 参照：T2059・331a25～b10；慧皎著／吉川忠夫・船山徹訳 [2009]、157～158頁、諏訪義純・中嶋隆藏訳 [1996]、16～17頁。
- ²⁶ 例えば『史記』魯仲連鄒陽列伝には「鄒陽は、辞、不遜なりと雖も、然れども其の物を比し類を連ぬる、悲しむに足る者有り。」とあり、また『韓非子』難言一には「多言繁称、類を連ぬ物を比ぶれば、則ち虚にして用なしと爲われ」とある。
- ²⁷ 高崎 [1998]、164頁。
- ²⁸ 『尚書』の序に「典、謨、訓、誥、誓、命之文。」とある。「典・謨・訓・誥・誓・命」とは『尚書』の六種の文体であり、後世の文体に非常に大きな影響を及ぼした。「典」とは「常道」の意であり、「重要な歴史的事件のあらましが書かれたもの」、「謨」とは「謀議」の意であり、「臣下の君主に対する言葉」である。参照：『中華百科全書』

(*Chinese Encyclopedia Online*, 1983)

²⁹ 参照：「而經來茲土。乃以秦言訳之。典謨乖於殊制。名実喪於不謹。到使求之弥至。而失之弥遠。頓轡重関。而窮路転広。」(T2145・53a14～16)

³⁰ 「深い知識をもった師」の意であり、「淵識」に同じ。

³¹ 参照：「不遇淵匠。殆将墜矣。」(T2145・53a17)

³² 参照：「究摩羅什法師。慧心夙悟。超抜特詣。天魔干而不能迴。淵識難而不能屈。」(T2145・53a20～21)

³³ 羅什は「吞針術」をもっていたと伝えられるが、そうした「魔術」も譬喩の多用と同根かもしれない。参照：「(姚) 興嘗て羅什に謂いて曰う。『大師聰明にして超悟たり、天下に二莫し。何ぞ法種をして少しく嗣がしむ可けんや。』遂に伎女十人を以て、逼りて之を受け令む。爾の後、僧坊に住まず、別に解舎を立てり。諸僧多く之に效う。什乃ち針を聚め鉢に盈たし、諸僧を引きて之に謂いて曰う。『若し能く見効いて此れを食らう者、乃ち室を畜う可きのみ』と。因って匕を擧げ針を進む。常の食と別たず、諸僧愧じて服して乃ち止む。」(『晋書』卷九十五)